

『人とのかかわりから生き方を学ぶ』

子どもを幼い頃から十分にあまえさせることの必要性は、以前からよく唱えられていたことです。これは無責任に子どものやりたい放題にあまやかすことではありません。人間が生まれながらにして備え持っている「人にあまえたい」という欲求を幼い時期にたっぷり満たしてやることに意味があると思われます。子どもの頃に、その欲求が満たされていない人間は、大人になって人格にさまざまな問題が生じると考える人もいます。その問題の一例として、他人に心を閉ざしたり、攻撃的になったりするというのです。

親にスキンシップをしたり、だだをこねたりしてあまえられるということは、言葉の少ない幼子にとっては人との信頼関係を築く第一歩となります。このことは、子どもにとって心を平静に保つことができ、安定した心の成長には欠かすことができないものなのでしょう。特に極めて幼い時期に醸成された信頼する心は、子どもの人格形成の大きな基盤となると思います。

こうした子どもが、ある程度成長した時に、親に対して生意気なへらず口をたたいたりすることは、健全な成長のあかしだそうです。子どもが親を信頼しているからこそ、そのような状態になるといえます。

子どもが親の顔色を見ながら、常に親の機嫌を損ねないような言葉づかいに終始していたとしたら、それは異常な状態といえます。その異常な状態を親が認識することなく「うちの子は本当にいい子だ」と思っているとしたら、それは親の思いどおりになる親にとって都合のよい子に過ぎません。往々にして、そのような環境にある子は、家の外ではうっぴんのはけ口を自分より弱い者に向けたり、親以外の大人に対して必ずしもよい子の対応ができていたとはいえません。そういう子が問題行動を起こして親に苦情が入ったときなど、その親が「うちの子に限って信じられない」といったことはよくあることです。子どもの内面を親が十分にとらえてはいないのです。

子どもが人間関係を正常に築くことができるか否かは、親との関係の持ち方にかかっています。

最近になって親子の関係のあり方に関して危惧されていることがあります。現代人の個人主義傾向に伴って、家庭のあり方も変化してきているといわれています。家族単位の安らぎや楽しさといったものが最優先され、親子の衝突や昔ながらの厳しい子どもへの指導がないということです。親子の関係をぎくしゃくのない楽しいものにしようという意識が強くなり、子どもに嫌われないために「いい親」でいようとする傾向が強まっているのだそうです。そんな家庭で育った子は、何でも自分の思いどおりになると勘違いしたり、自己中

心的な行動をとることが多くなります。子どものことで外部から非難されたり、学校で気に入らないことがあれば、親は家族の都合最優先が当たり前という心持ちを強くして出陣するのです。クレーマーと呼ばれる親が増えているというのがわかるような気がします。

子どもがだだをこねたり、口ごたえしたり、反抗的な態度をとることは、決して異常なことではありませんが、親がそれを全て子どもの好き放題にさせておくことはよろしくないことだと思います。子どもの自己中心に屈することなく、毅然として子どもに立ち向かうことが必要です。子どもはすぐ素直に従順になることはないにしても、やがては、自分の理不尽さに気づくことがあるでしょうし、そのときの親からいわれたことなどを大人になっても忘れることはないのです。家庭において親子の対立や衝突があることは当然のことなのです。子どもが自立し、親離れした後に、そのような親子関係の葛藤があったかなかったかは、子どもが正常に社会性を身につけていくことと深い関連があると思います。

人は人とのかかわりの中で人としての成長をとげます。特に、親子関係のあり方は重要な鍵といえます。

子どもたちは、こうして生き方を学びます

- ◎批判ばかり受けて育った子は 非難ばかりします。
- ◎敵意に満ちた中で育った子は だれとでも戦います。
- ◎冷やかしを受けて育った子は はにかみ屋になります。
- ◎ねたみを受けて育った子は いつも悪いことをしている気持ちになります。
- ◎心が寛大な人の中で育った子は 我慢強くなります。
- ◎励ましを受けて育った子は 自信を持ちます。
- ◎ほめられる中で育った子は いつも感謝することを知ります。
- ◎公明正大な中で育った子は 正義心を持ちます。
- ◎思いやりのある中で育った子は 信仰心を持ちます。
- ◎人に認められる中で育った子は 自分を大切にします。
- ◎仲間の愛の中で育った子は 世界に愛を見つけます。

(「アメリカインディアンの教え」加藤諦三著より)